

合格と心模様

高校 17 期 前田新造 (株式会社資生堂社長)



晴れて八尾高校に入学したのが今から 40 年以上前のことである。合格した時のこと、今でも鮮明に思い出すことがある。それは、合格発表後、急いで家に帰宅すると、父と母が待ちかねていた。合格の旨を早口で照れるように言葉少なく伝えると、二人とも本当に嬉しそうな顔を見せてくれた。中でも父は驕には殊の外厳しく、普段でも殆ど笑顔を見せない威厳のある明治生まれの人間。それが心から安堵した様に嬉しそうに笑った。その笑顔は今でも覚えている。そして一言。「早く制帽を買ってきてさい、それと学生服のボタンと、、、」と言って、はるかに余るお金をくれた。余程嬉しかったのだろう。

それから 1 浪を経て、大学入学が決まった時、父は八尾高校合格時とは異なる表情を見せた。嬉しそうな顔は見せたが、一瞬諦念の目をするのを私は見逃さなかった。淡々としていた。淋しかったのだろう。私は姉と兄二人の末弟で、その姉と兄二人全て既に東京に出ていたので、父親としては私には大阪の自分の手許にいてもらいたかったのだろう。しかしその望みは、合格の朗報と同時にもろくも断たれ、最後の息子も東京の大学に行ってしまうことになる、、、。合格してくれた安堵と引きかえに離れていく息子への惜別を強く感じたのではないか。当の私も、それを肌で強く感じていて、大学合格の喜びなどなく、一人で生きる冒険心はくすぐられるものの、親の期待を裏切って上京する「うしろめたさ」が心の中を支配していた。

正に対照的な合格の時の反応であった。それから幾つもの桜の季節を迎え、テレビで合格発表のシーンが映し出される。その度に、心から嬉しそうな父の顔、そして嬉しそうな表情だが目に淋しさをたたえた父の顔がダブる。その父も亡くなって 26 年の歳月が流れた。しかし、つい 2~3 年前の事のように思い出す。そして今も私にとって揺れる心の 1 つであり、ほっとした嬉しさと、ホロ苦い忘れ得ぬ青春の断片でもある。